

茶碗の最高峰「曜変天目」

DEGAWA Tetsuro

出川 哲朗

大阪市立東洋陶磁美術館 館長

曜変天目は世界に3碗しか現存せず、そのすべてが、国宝に指定されている。宋時代に建窯で焼成されたもので、南宋の宮廷でも使われ、日本には室町時代にもたらされ、徳川將軍家にも伝えられた。この曜変天目の釉上に丸い斑文があり、その周囲が青く光り輝くのを特徴としている。この青く見える部分は固有色ではなく、構造色と考えられ、現在その解明が進められている。

口絵 19 ページ参照

1 はじめに

国宝に指定されている中国陶磁8点のうち、天目茶碗は5点を占める。その中でも曜変天目茶碗は3点ある。優れた古典籍・古美術を数多く蔵する東京の静嘉堂文庫美術館、傑出した東洋美術と茶道具のコレクションで知られる藤田美術館、そして京都の大徳寺龍光院がこの3点を所蔵している。

まず、静嘉堂文庫美術館所蔵の曜変天目茶碗は徳川將軍家に伝わり、三代將軍徳川家光が乳母の春日局に与え、そののち淀藩主稲葉家に伝わった。1918年の稲葉家の売り立ての後、1934年に岩崎小弥太が購入したものである。

藤田美術館の曜変天目茶碗(図1)は、伝承では嘗て徳川家康(1542~1616)の所蔵品であり、初代水戸藩主の頼房(1603~1661)に譲られ、水戸徳川家に伝来した。その後、1918年の水戸徳川家の売り立てで藤田平太郎男爵が購入し、現在に至るのである。大徳寺龍光院所蔵の曜変天目茶碗は津田宗久(?~1591)が所持し、その後龍光院を

開山した江月宗玩(1574~1643)に伝わり、現在まで龍光院に伝わっている。

これら3点の曜変天目には、内面に大小様々な円形の斑文が不規則にあらわれ、その斑文の周辺が青く輝き、またそれらの間の一部分には兎毫(とこう)状に青い筋がみえる(図2, 3)。

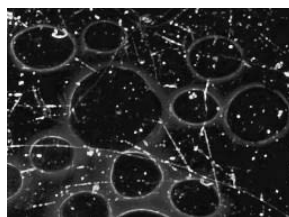


図2 斑文の写真
(撮影 三好和義)

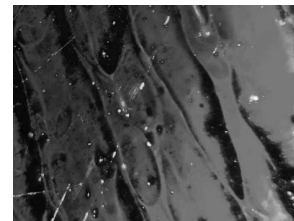


図3 拡大写真
(撮影 東京理科大学中井研究室)

2 曜変天目の歴史と変遷¹⁾

曜変天目は中国の建窯で焼成された建盞(けんさん)の一つである。盞は碗を意味し、広義には建盞とは建窯で焼成された黒釉碗のことである。建盞は北宋時代に蔡襄(さいじょう)(1012~1067)による『茶録』(1064)のなかで触れられている。この「茶盞(ちゃさん)」の項で、「茶の色は白いいので、黒盞がいい。建安(建窯)で作るものは紺と黒の紋があり、兎毫の如くである。碗が厚いので冷めにくい」と、建盞を高く評価している。北宋の徽宗(きそう)皇帝(1082~1135)による『大観茶論』においても、建盞は高く評価されている。中国では11世紀末から12世紀にかけて建盞が喫茶の茶碗として最上位のものとされていたのである。このころの喫茶は団茶(だんちゃ)を粉末にしたものに湯を注ぎ、かきまぜて飲む点茶法(てんちゃほう)であり、茶の良否や点て方などを競う闘茶(とうちゃ)も行われていた。日本で天目と呼びならわされるこの器形は、中国での闘茶の流行にあわせて生み出されたものである。

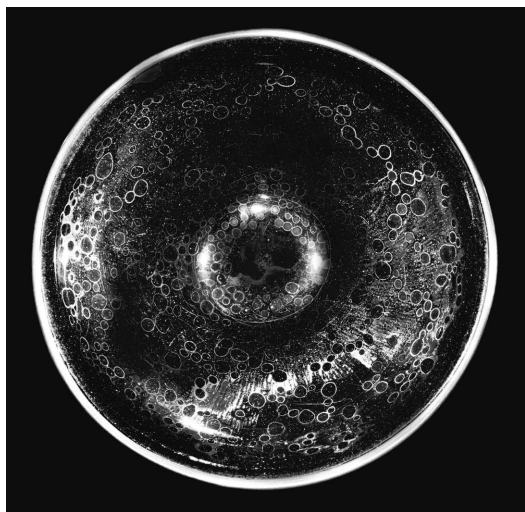


図1 曜変天目茶碗
(撮影 三好和義)

しかし、この「天目」という言葉は中国では使われていなかった。天目は中国の浙江省北部と安徽省との間にある天目山に由来するというのが通説である。この天目山で修行した日本の留学僧が持ち帰った喫茶用の黒釉の茶碗を、日本で天目と呼ぶようになったといわれている。近年、天目山でも窯跡が発見された。天目という語は、器形に対しても使われていた。小さな高台をもち、口縁部は内側に窄まったのち、外側にやや外反する物である。この語はまた黒釉の事も意味し、黒釉の掛かった茶碗も天目と呼ぶようになった。

室町時代前期に成立した「往来物」には建盞、曜変、油滴、烏盞（うさん）、天目、鼈盞（べっさん）などの語句が登場しており、室町後期には『君台観左右帳記（くんだいかんそうちょうき）』によって具体的にそれらの言葉がどのような意味内容かわかるのである。『君台観左右帳記』とは足利将軍の所蔵する中国からもたらされた書画や座敷飾り、陶磁器などの器物のランク付けについて書かれた伝書ともいえるものである。3部構成になっていて、器物の説明の中の「土之物」の項には各種の天目茶碗が充てられている。

「曜変、建盞の内の無上也。世上になき物也。地いかにもくろく、こきるり、うすきるりのほし、ひたとあり。又、き色・白色、こくうすきるりなどの色々ましりて、にしきのやうなるくすりもあり。万正の物也。」（曜変天目は、建盞のうちの最上のもので、世間にめったにない。地がたいへん黒く、濃いのが淡い瑠璃色（るりいろ）の星形の斑点が一面にある。また、黄色や白色、あるいはきわめて淡い瑠璃色などの色が種々まじっていて、錦のような釉もある。これは万正はする物である。）と評価し、具体的な価格まで記されていることから、このころ実際に流通していたと考えられる。中国では「曜変」という言葉は見られず、日本で星のような光彩がある窯変に対して、光輝くという意味のある「曜」をあてて、曜変という言葉に変化していったと思われる。

日本では、三代将軍足利義満が、明の永楽帝との勘合符による交易を始めたが、義満は同時代の文物よりも、宋時代の書画や工芸品に憧れと深い関心を寄せ、宮廷趣味と禅宗に影響を受けたコレクションを形成していった。こうした経緯で南宋時代に宮廷でも貴重であった曜変天目をはじめとする宋代の書画も日本にもたらされたのである。曜変天目は日本でのみ伝来しているのである。

3 曜変天目の色彩と構造

曜変天目の光沢のある色彩は構造色と考えられている。これに対して、陶磁器の上絵付の色は固有色である。固有色は顔料などが有している色そのものである。構造色は玉虫の羽などにみられる多層膜による干渉で現れるものや、

オパールや漆工芸の貝の象嵌などで、フォトリック結晶*の反射によって現れるものや、その他、光学ディスクの表面に見られる回折格子の反射光によって現れるものなどがある。曜変天目では薄膜での光の干渉によって得られる光彩が認められる。このまばゆいばかりの曜変の光彩を引き起こす構造色に関して、その表面構造の解明が進められている²⁾。光彩のメカニズムは電子顕微鏡レベルで観測される微細構造によって解明されるもので、黒釉の最表面に偶然できた厚さが40 nm程度で600 nm～700 nm程度の波のある薄膜層での構造によって青色系統の光彩が現れる。

4 最近の話題

中国の浙江省杭州市内から藤田美術館所蔵の曜変天目茶碗に類似した陶片が発見された³⁾。この曜変は不規則な結晶斑の間を藍色の縞が漆黒の地の上に浮かび上がり、また碗の外側は丸い結晶内が青く光輝いている（口絵19ページ参照）。この曜変天目の陶片の断面を観察すると黒胎上に1 mm程度の黒釉層があり、その最表層に曜変が現れて、曜変は釉薬の表面だけの現象であることがわかる。出土した場所は南宋の宮殿近くの公的な建物で⁴⁾、接待のために使われていたことになり、南宋時代に宮廷でも曜変天目茶碗が使用されていた可能性のあることを、この新発見の出土品が示している。これまで、曜変天目は日本にしか伝来されておらず、輸出用であると考えられていたこともあったが、南宋の宮廷において、皇帝も使ったかもしれない貴重な茶碗であったことがわかる。

5 おわりに

南宋の皇帝に献上され、また日本の足利将軍が手にした可能性のある曜変天目は茶碗の最高峰の名を冠するにふさわしいだろう。偶然によってもたらされたとされる曜変天目を再現するという至難の試みもなされている。曜変天目出現のメカニズムや、その表面構造についての研究が現在進められている。青を基調とした様々な輝きが現れる曜変天目の虹彩はまさに現在でも人々を魅了してやまないものである。

参考文献

- 1) 出川哲朗, 曜変天目と藤田美術館の茶道具, 国宝曜変天目と日本の美展図録, 2015, 朝日新聞社.
- 2) 長江惣吉, 福島喜章, 宋代建盞の光彩の研究, 東洋陶磁, 2012, p. 41.
- 3) 小林 仁, 陶説 2012, 第716号.
- 4) 鄧永穎, 南宋早期宮廷用瓷及相關問題探析, 東方博物, 2012, 42 輯.

用語解説

*1 フォトリック結晶：屈折率が周期的に変化するナノ構造体で、周期によっては可視光を反射し、メタリックな美しい輝きを呈する。

[連絡先] 530-0005 大阪府大阪市北区中之島 1-1-26（勤務先）